

献呈の辞

一雨ごとに暖かさを増し、桜の便りが聞かれる季節となりました。春は森羅万象の胎動する歓喜の季節ですが、また定年のために退職される先生方とのお別れを余儀なくされる季節でもありません。

専修大学文学部では、二〇〇九年三月末日をもって、日本語日本文学文化学科の柘植光彦教授が定年を迎えられ、退職されることになりました。

柘植先生は、一九三八年に東京都杉並区阿佐ヶ谷にお生まれになり、一九五八年東京大学教養学部に入学され、一九六三年三月に東京大学文学部仏文学科を卒業されました。その春に東京大学大学院の国語国文学専攻にすすまると、修士論文では永井荷風を、博士課程では戦後・現代文学を研究対象とされ、大江健三郎・吉行淳之介・三島由紀夫・埴谷雄高・福永武彦・遠藤周作・村上春樹など三十をこえる作家について多彩な研究を重ねてこられました。

文学は時代を映す鏡でもあります。柘植先生は、文学を広く時代や社会の反映として受け止め、単にせまい領域にしばられた研究から、常に自由であろうとつとめて来られたように思います。作家へのインタビュという新しい試みが始められ『現点』という雑誌には、十余年にわたり、専修大学の大学院生とともに歩まれた先生の研究の軌跡をうかがうことができるように思います。そこには個々

の作家の枠を越え、時代の潮流のなかに浮かんでくる様々な事象を広く捉えようとする先生の理智と感性が鋭く働いているようにお見受けいたしました。例えば、今では耳慣れた知的所有権や著作権といった問題をいち早く取り上げられたのも先生の時代とともにあらうとする研究姿勢のあらわれではないかと思われます。

日本文学研究の世界では、生きている作家は業績が未確定のために取り扱わないのが通例であったと聞き及んでいます。その殻を破り、先生は現代文学研究という新しい分野を大胆に切り拓いてこられた、まさに先駆的研究者ということができるよう思います。

先生が専修大学に着任されたのは、一九七四年四月、三六歳の若さでした。爾来、三五年の長きにわたって専修大学の学部および大学院の教育に尽力され、また学内の各種委員などの仕事も厭うことなく誠実に務めてこられました。

先生のゼミ・講義は、単に現代文学の領域にとどまらず、文学の周辺にある映画・テレビ・マンガ・アニメにも及んでいます。いまでこそアニメやマンガが日本文化の一つとして積極的に位置づけられています。が、当時の学生にとって、学問や研究の対象になるとは思いもよらなかった同時代の作家の作品があざやかに学問的に読み解かれていくことに新鮮な驚きを覚えたことでしょう。毎年のように柘植ゼミを希望する学生が溢れ、教務担当者は教室さがしに頭を悩ます程でした。

また、柘植先生は大学院においても多くの優秀な若手研究者を育ててこられました。特に当時は博士課程で現代文学を専攻できる大学院がなかったことから、他大学や遠く海外からも柘植先生のもと

で学びたいという院生が数多く集まりました。その数は修士の学位を取得した者が四二名、博士の学位を取得した者は一七名に及びます。なかにはヨーロッパやアジアからの留学生で、帰国後に大学の専任教員となり、研究者として活躍している卒業生が少なくありません。

また柘植先生がおつとめになった学内の役職は、入学試験検討専門部会委員、入学試験委員、国文学科長、教員資格審査委員会委員、学生部次長、自己点検・評価委員会委員など、実に多岐に渡っています。なかでも記憶に新しいのは、平成一九年より定年退職の本年までおつとめ頂いていた自己点検・評価委員会委員のお仕事です。たまたま平成一九年が基準協会の認証評価の年に当たり、評価項目や記述のスタイルの大幅な変更にともない、各学科専攻の執筆担当者との調整はご苦労の多い大変な作業であったと思われます。なんとか文学部が「おおむね適正」との評価を得ることができましたのも、偏に柘植先生のご尽力の賜といっても過言ではありません。

専修大学文学部は、二〇一〇年に向けて大きく改革の第一歩を踏み出そうとしています。これまで心理学科と人文学科社会学専攻を母体として新学部である人間科学部を創設し、文学部の三学科六専攻を七学科に再編し、新たな時代のニーズに応えようとしています。こうした大変な時期に柘植先生のような柱石が文学部を去られることは大変な痛手であり、かえすがえすも残念でなりません。柘植先生の益々のご健勝とご活躍を祈念し、献呈の辞といたします。

二〇〇九年三月

専修大学文学部長 矢野 建 一